

シンポジウムで行ったアンケートのまとめ

シンポジウムへの参加者に以下のアンケートをお願いし、約30%の方々より回答をいただいた。御覧頂けるように、そのアンケートではいくつかの質問とともに、シンポジウムへの参加の動機、シンポジウムに対する感想、今後の企画、男女共同参画に関する意見の項目で自由に記述していただいた。それら記述していただいたご意見等は概要としてシンポジウム報告書でも述べているが、ここでは、皆様に頂いた全てのご意見感想を含め、アンケートの結果をまとめて掲載する。(尚、頂いたご意見感想等の語尾等については若干手を入れさせていただいた。)

シンポジウムでお願いしたアンケート

アンケートのお願い

本日はご参加いただき、誠にありがとうございました。今後の参考とさせていただきますので、以下のアンケートにお答え下さるようお願いいたします。

- Q1 あなたの性別と年齢をお教え下さい。
(1. 男性 2. 女性) (1. 10代、2. 20代、3. 30代、4. 40代、5. 50代、6. 60代、7. 70代以上)
- Q2 職業と、もしよろしければ、会社名、職名等もお教え下さい。
()
東北大学教職員の方は、所属部局・職名(常勤/非常勤)をお書き下さい。()
東北大学学生・研究生の方は、所属学部・研究科・学年をお書き下さい。()
- Q3 これまでに男女共同参画について何かご存知でしたか? (はい、 いいえ)
- Q4 このシンポジウムのことをどこでお知りになりましたか。
(ポスター、チラシ、広報誌、学内連絡、その他)
- Q5 このシンポジウムに参加された動機は何ですか。()
- Q6 日時について : a. 良かった、b. 悪かった
bとお答えの方にお聞きします。どのような日時が良いでしょうか。()
- Q7 場所について : a. 良かった、b. 悪かった
bとお答えの方にお聞きします。どのような場所が良いでしょうか。()
- Q8 内容について :
1) 活動報告 a. 良かった、b. 悪かった、c. どちらとも言えない
2) 基調講演 a. 良かった、b. 悪かった、c. どちらとも言えない
3) パネルディスカッション a. 良かった、b. 悪かった、c. どちらとも言えない
4) 東北大学宣言 a. 良かった、b. 悪かった、c. どちらとも言えない
5) 全体として a. 良かった、b. 悪かった、c. どちらとも言えない
- Q9 内容について、ご感想をお聞かせください。
()
- Q10 男女共同参画推進に関連したシンポジウムで、何かご希望の企画がありましたらお書き下さい。
()
- Q11 東北大学における男女共同参画推進、または学問・教育におけるジェンダー問題についてのご意見をお聞かせ下さい。
()

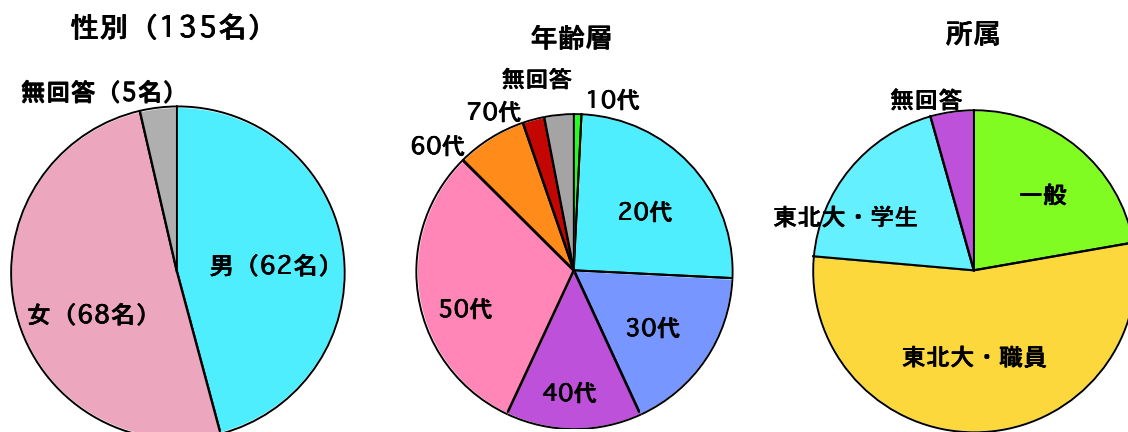
——アンケートへのご協力、ありがとうございました。 東北大学男女共同参画委員会——

Q1 あなたの性別と年齢をお教え下さい。

Q2 職業と、もしよろしければ、会社名、職名等もお教え下さい。

東北大学教職員の方は、所属部局・職名(常勤/非常勤)をお書き下さい。

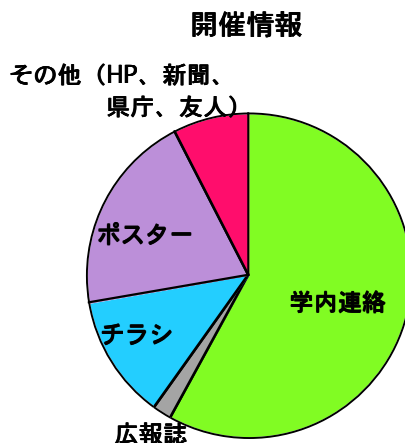
東北大学学生・研究生の方は、所属学部・研究科・学年をお書き下さい。



回答者の性別は男女ほぼ半々であった。年齢層は10代から70代まで各層にわたっているが、特に50代の参加者(回答者)が多かった。職業・所属は一般の方25%、東北大職員50%、学生・院生25%であった。なお、一般の方には福島大学、茨城大学、名古屋大学、秋田県からの参加者も含まれる。

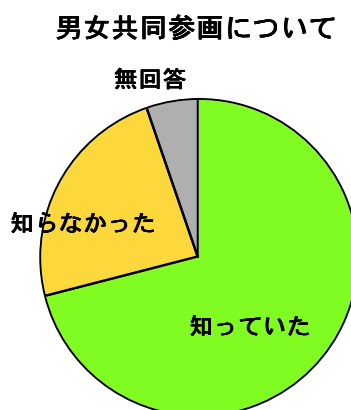
Q3 これまでに男女共同参画について何かご存知でしたか？

「男女共同参画」については、回答者の75%近くの方が知っていた。



Q4 このシンポジウムのことをどこでお知りになりましたか？

シンポジウムの開催に関する情報源としては、学内連絡（広報、パンフレット、掲示、事務連絡等）によるものが60%を占めた。ホームページ、新聞、県庁等で知ったという回答も散見された。



Q5. このシンポジウムに参加された動機は何ですか？

シンポジウムへの参加の動機については以下のように、いくつかのグループに分類できる。

(1) 同僚、友人、事務、教授からの勧誘によって、(2) ポスター、広報、ホームページ等により興味を抱いて、(3) 男女共同参画についての興味および勉強の機会として、(4) 男女共同参画に関する特定の目的・興味対象に関する情報・知識を得るために、(5) 東北大学がこの男女共同参画推進に、なぜ、どのように取り組もうとしているかについての興味から、(6) 研究テーマ等職務上の必要性から、(7) 男女共同参画ワーキンググループメンバー、学内関連委員会委員として、(8) 男女共同参画に関する行政・実務を担当中で共同参画推進に関する参考のため、(9) これまでの男女の不平等についての経験から、(10) 自身の将来計画への不安から。

記述された動機

(1) 開催通知があったため；学内で周知があったため；教授に勧められて；担当者から誘われて；友人に誘われて；委員による案内；学科長よりの依頼；事務からの働きかけ；部局割り当て；動員。

(2) パンフレットを見て基調講演を聞きたいと思った；パネルディスカッションに興

味；講演の内容に興味。

(3) 男女共同参画に興味があったため；関心があったため；男女共同参画とその現状を理解したいと思ったため；現状と動向把握のため；男女共同参画について知る機会であると考えたため；ホットな話題だから；男女共同参画社会の考えを深めたい；女性としての興味；職場で参加を呼びかけられたが、元々この問題に関心があった；大学でのセクハラ等を新聞で読み、関心を持ったから。

(4) 男女共同参画を推進するために何をすべきかヒントを得るため；意識改革がどの程度進んでいるのかを見たかった；男女共同参画について、大学の中ではどのようになっているか知りたかった；学術分野での男女共同参画の状況を知りたかったから；女性研究者問題には在職中から問題意識があったので；これからの男女差がない社会のため何をしていくのか、何が考えられるのか、知りたかった；学校の男女共学化問題で女子校は残す方がいいと考える根拠があるかどうか知りたかった；教育者の立場から見る男女共同参画社会形成についての勉強のため；女性の教育者が増えることを望んでおり、そのための制度改革の具体化を期待するため；人権教育に興味があるため；女性が社会に進出する一方で、男性も家庭での役割をもっと持つべきである。そのためには職場の意識改革が必要だと思っており、興味があったため；病院にいと、外の社会では男女比が逆だということを忘れてしまう。どのような実態なのか知りたいと思ったため；男子学生には先輩が後輩にアルバイト先を紹介する慣習やネットワークがあるが、女子学生にはそれがなく、金銭の面で苦勞している問題に関心がある。何か考えるヒントが得られるかもしれないと期待して；過度のジェンダーフリーが社会問題化されており、トピックの一つであると思うので。

(5) 東北大学における現状を知る機会だから；東北大学の男女共同参画の方向性を見極めるため；以前から東北大学の男女共同参画活動に興味があった；大学における男女共同参画への取り組みを始めた動機を知るため；東北大学としての意識を聞きくため；東北大学が男女共同参画をどのようにとらえてスタートさせるのか興味があった；東北大での取り組みの状況を知りたかった；今春の東北大資料館での企画において、日本で初めての女性を入学させたのが東北大であることを知り、興味を持った；新任者として東北大学の取り組みを知るため；旧帝大においてこのようなシンポジウムが開催されることに興味を感じたため。

(6) 研究テーマ・分野に関連があったため；フェミニズムの研究をしているので；研究上の関心。

(7) 在り方委員会委員としてその後の経緯を知るため；薬学部内での男女共同参加ワーキンググループのメンバー；ワーキンググループの一員として勉強のため；部局の男女共同参画委員；応物学会の男女共同参画に関するシンポジウムの企画に参加している；名古屋大学の男女共同参画ワーキンググループ委員。

(8) 法人化以降の男女共同参画の在り方の参考にするため；現在事務局内において男女共同参画の検討を行っているから；県の男女共同参画事業の参考とするため；福島大学の男女共同参画の参考に；男女共同参画に関する仕事をしている；男女共同参画のための方策を探るため。

(9) 男性と対等に教育を受けさせてもらえなかった体験があるため；自分も似たような悩みを持っているので；男女の不平等が今なお続いていることに憤りを感じるため。

(10) 将来結婚生活と仕事の両立をすることが不安なため；自分の将来を考えると、どのような話があるのか聞いておいた方がよいと思ったので；自分の就職に際して様々な問題があることに気付いたから；将来のことに不安がある；妻が研究者なので自分のこととしてとらえるため；今後どのように仕事を続けていくべきであるか、悩んでいた。

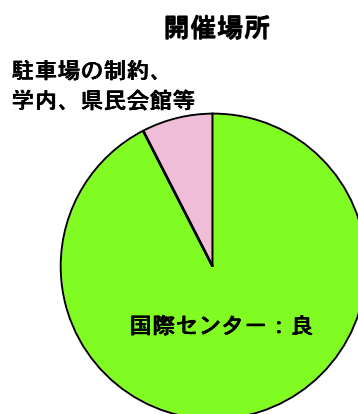
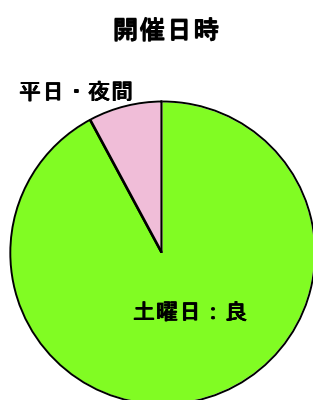
Q6 日時について：(a. 良かった、b. 悪かった)

bとお答えの方にお聞きします。どのような日時が良いでしょうか。

Q7 場所について：(a. 良かった、b. 悪かった)

bとお答えの方にお聞きします。どのような場所が良いでしょうか。

開催日時については平日ないし夜間を希望する意見もあったが、今回の土曜日を良とするものが90%近く、比較的多くの参加が得やすいものと思われる。開催場所は、東北大学内の施設、または市内中心部の施設を使ってはとの意見もあったが、国際センターを良とするものがやはり90%であった。



Q8 内容について：

- | | |
|----------------|------------------------------|
| 1) 活動報告 | a. 良かった、b. 悪かった、c. どちらとも言えない |
| 2) 基調講演 | a. 良かった、b. 悪かった、c. どちらとも言えない |
| 3) パネルディスカッション | a. 良かった、b. 悪かった、c. どちらとも言えない |
| 4) 東北大学宣言 | a. 良かった、b. 悪かった、c. どちらとも言えない |
| 5) 全体として | a. 良かった、b. 悪かった、c. どちらとも言えない |

シンポジウムの内容に関しては、すべてにわたり、良とするものが70－80%であった。

Q9 内容について、ご感想をお聞かせください。

シンポジウム全体としては、「分かりやすかった」、「興味深く聞いた」、「現状を理解した」、「これまでの男性優位社会での女性の努力が理解できた」など、好意的感想が述べられていた。今後、このような議論を継続的に続けるとともに、その啓発、教育、広報活動を活発に進め、特に学生の参加を増やすこと、また、職場の環境整備、有給休暇、休日出勤問題など、より具体的な課題を取り上げていくよう、そして、今後も男女共同参画を推進することを大学に期待するとの意見が寄せられた。

記述された感想

基調講演では日頃感じていることを話していただき、いろいろな意味で励みになった；原ひろ子先生はこの8年間で提言の内容が重複していることを指摘され、解決されていない課題を説明された。小舘先生はネットワークによってどんな学会員がいるのかを見

えるようにすることの大切さを指摘され、具体的な活動について説明された。私は人文系の学生なので本日の議題にどれだけ共感できるか不安だったが、聞いていて非常に面白かった；Positive action の考えを知り、良かった。単純な平等主義でないところが興味深い；小舘先生の work & home のバランスという言葉が印象的でした。やはり、職場の環境が整備されるということで女性も男性も平等に社会において活動できると思う；大変勉強になった。

基調講演は一人でよかったのでは；基調講演に東北大の方を入れてほしかった。従って東北大の現状認識が何かはっきりせず、議題もぼやけたように感じた；講演者は女性だけではなく、男性も登用して欲しい；もっと若い人（20～30才）の講演を聞きたい；フロアからの質問時間がなくなったのが残念；現状報告がメインで、もっとアグレッシブな意見が聞けず、意外。

パネルディスカッションではいろいろな立場からの報告があり興味深く聞いた；面白かった；進行が素晴らしかった。シモンズ氏の発言には深く考えさせられた；シモンズ先生のお話は具体的で、問題という自覚がなかった日常も矛盾の多いことがわかった；シモンズ先生は自分の考えを積極的に出し、面白かった；シモンズ先生の話がわかりやすく面白かった。大事なことでも堅い話では聞きたくなくなる。

パネルディスカッションの時間が足りず、結果内容にまとまりがない；ディスカッションをもっと長くやってほしい。つっこみが足りない；パネリストが個々の意見を述べただけで議論になっていないことが残念。不均衡の解決法について議論して欲しかった；問題点の掘り下げをして頂きたかった；反対意見グループとのディスカッションが欲しかった；パネラーに外の人もいれよと思った；パネルディスカッションは問題を一般にわからせる意味で良くできていたが、少し企画ががちりしすぎている、あまり意味のある論点はなかったように思う；もう少し多くのパネラーがいたら良かった；フロアとの質疑応答も是非見たかった。

女性が男性社会である学術世界に入るための努力と現状がよくわかった；自分で持っていた意見が古いと感じた。人的資源が減少するに違いない将来において、資源を有効に活用するという点から当然必要になると感じた；現状の理解を深められるとともに問題意識が強くなった；このような取り組みの存在を初めて知った。気軽に参加できる雰囲気良かった；女性のためだけでなく、男女のためということがきちんと理解できて良かった；論点が明確で、データも多く示されており、大変分かりやすく問題意識も明確で良かった；各分野から現在の日本がなぜ女性研究者が生まれにくい状況にあるのかと

いうことを突き詰めていて、考えさせられた；このような企画に初めて参加した者としては分かりやすかった；問題意識の整理ができた。大学の責務と社会へのアピールをしたことを評価したい；私は学生であり、社会とあまり関わっていないせいか、周りで男女差はあまり見たことがないが、このようなシンポジウムを開くことで、意識改革が進むなら、きっと回復すると思う；東北大学の教授など教員で、これだけ女性の割合が少ないとは知らなかった；男女共同参画については以前から考えていたが、今日のシンポジウムで見逃していた視点がわかり、有意義であった；お膳立てが整ってから始めるということはやらないことと同じである。それは私たちの職場も同じなので、できることからやっていくという意見には大変共感した；政治色がほとんどなくて良かった。今後も一部の過激なフェミニストとは関係を持たないよう願う；現時点では女性がより速やかに参画できる流れを作り出すことが重要で、その意味で大きいことであったように思う；あまり意識していなかったが、本格的に討議し、男女共同参画問題に対し取り組んだのは良かった；いろいろ思い当たる点があり、参考になった；大学の中の男女共同参画について、少し分かった。非常にジェンダーバランスが悪いように思った；学生としては大学に最低4年間いる場所という認識があると思う。今回のシンポジウムでは社会の発展に重要な場であると再度確認できた。この考え方を学生のみならず社会全体の共通認識とするにはどうすれば良いか考えた；女性の現状の認識が変わった；学生では察しがたい職場の現状を知ることができ、参考になった；第1回のシンポジウムとして多くの参加者を得たのは大変良かったと思う。男性の参加者の多いことに感心した（男女共同参画と銘打つと男性の参加者が少ないのがまだ常である）；このような企画を繰り返し行うことで、大学全体としての男女共同参画への関心が高まるきっかけになればと思う；一般につながることなので、まず学ぶ場から意識して変えないと難しい；有意義であった。さらにディスカッションを十分に行う必要性を感じた；アンケートなどの結果提示は役だった。人権問題、研究能力などの視点をさらに深めて欲しい；最近小、中、高校生の非行がひどいが、これからの教育する教官層に少しその辺も考えて欲しかった；若い人はうらやましい。女と生まれても機会をねらって男女に関係なく努力して欲しい；やっとスタートラインにたったという感じです。今後どのように進むのか楽しみである；東北大学全体として現状、問題点をつかむことができた；総長による宣言に力強いものを感じた；シンポジウムの取り組みに敬意を表す；このような企画は第一歩として素晴らしい。継続していろいろ企画されることを望む。継続は力です；今後も同様のパネルディスカッションを継続して欲しい。

これからどのようにするか具体的なディスカッションが少ない；事項報告のみで、全体としての価値観に基づく各論が乏しい；現状報告にとどまり、明確な男女共同参画への

指針を提示するまでに至らず残念；シンポジウム全体が現状と活動報告の羅列で終わり、残念；教職員のための委員会組織、シンポジウムであり、目指すものが見えない；話題が豊富で、問題点が絞れなかった。人事に対する発言が多く、一面的な会であった；様々な問題があることが分かったが、もっと深い議論が欲しい；第1回ということ欲張りすぎたのではないか？もう少し時間を短くして、要点だけを突くのも良かったのではないか；教育の在り方にまで及んで欲しかった；ジェンダーについての具体的な問題点が聞けて良かった。しかし、この問題を取り除いていくことは難しいとも改めて思った。最低限、有給休暇の取り方、休日出勤、超過勤務について見直し、男女とも家事・育児をしやすい環境をすべての人が考えてなければならぬと思う；女性職員や学生がどのように取り組むべきかなどのお話があれば良かった。

今後も企画がありましたら教えて欲しい（秋田県北部男女共同参画センター）；ホームページはあるのですか；委員会設置、シンポジウム開催は大変重要な意味を持っていたと思う。しかし、参加者が少ない。もっと宣伝した方が良い；第一回のシンポジウムということ会場も規模も大々的なのに参加人数が少ないのが気になりました。参加者の募集が足りないと思う。事前のパンフレットの配布など、広告が無駄になる；もっと多くの方にシンポジウムに参加して頂けたらと思います；大学における教育、研究において男女共同参画について啓発を積極的に実施する必要があると痛感；大きなテーマであり、学生教官を含め、もっと活発な議論が必要だと思う。

東北大学としてこのようなシンポジウムを開催することは良いと思う。ただ、開催が男女共同参画へのポーズのみに終わらないことを祈る。初めて女子学生を受け入れた大学ということや、シンポジウムの開催、東北大学宣言で取り組みへの免罪符としないで頂きたい；先生方やパネリストの方々の発言は素晴らしいと思う。ただ、大学やインテリ層にありがちなことなのですが、実行するところで結局止まってしまうのではないか？実際に動き、泥をかぶることを顧みず行動する方々がおられるのか不安を感じる。自分も教員の一員として反省しつつ、しかし、大学での今までの経験を考えると実行に関する危惧を捨て切れない。

私と同じような悩みや考えを持つ女性が多いことを知り、心強く思いました。今後家庭を持ったら、大学に残ることはあきらめようと思っておりましたが、私自身考え方を改めようと思った。

Q10 男女共同参画推進に関連したシンポジウムで、何かご希望の企画がありましたらお書き下さい。

今後の企画として提案いただいた内容はシンポジウムのテーマ、形式、男女共同参画に関するシステムの項目に分類される。

希望された企画

1. シンポジウムのテーマ

「ジェンダー学」シンポジウムの開催；ジェンダー学についての理解ができるもの；男女共同参画に関する世界の動向について；男女共同参画を妨げている歴史的要因；男女共同参画の本音と建て前、大学院教育、国際化；一般、中年、高齢者の今日の意識（差）について；ガラスの天井についての討論；職場における男女の働き方；法人化経営と学内・外における男女共同参画の現状と課題；女性が進学や就職で、大きな不利を受けることはないと思う。しかし、「働くこと」と「育児」「会社・大学」との連携みたいなものは就職の幅をととも狭くしていると思う。これを話しあってほしい；学部・大学院でのセクシャルハラスメント；男性の育児参加；今度は逆に男性が、子育てなど従来女性の世界とされていた部分にいかに参画していくかについて努力と現状をお聞かせいただけたらと思う；子供の側から見た男女共同参画、大学別から見た男女共同参画；小学生から大学生までの初中高等教育の関連について；意志決定、政策形成、政治の場への女性の参画（女性議員の拡大）などが今後21世紀の社会形成や経済活動に必要と思うので、これらに関する企画；今後もこのようなシンポジウムを行い、多様な女性研究者の話（研究活動以外の、例えば育児などについても）を聞きたい；母親としての人生を選択した元研究者と母親としての人生を選択しなかった研究者がそれぞれの道を選んだ根拠を議論してはどうか；今回のシンポジウムをふまえ、各部局でどのような取り組みを行ったか、次のシンポで取り上げてみてはいかがでしょうか。各部局の工夫を共有するために；推進のための具体策の検討；良くて悪くても実例を集めて聞きたい；「女性の人権」について辻村先生の話が聞きたい。

2. シンポジウムの形式

部局単位でのシンポジウム；大学内は他の学部や部局との接触がきわめて少ないので、小規模な集まり、2～3部局との集まりでお互いの現状を話しあうチャンスを作る；同

じ大学の教官同士でパネルディスカッション；東北大における取り組みを契機に他大学・学会との共催ないしネットを組んでの企画を期待したい。文学部の問題も取り上げてほしい；県内大学との連携合同シンポジウム；他大学の教官を交えたパネルディスカッション；分科会方式；企業の進んだところとタイアップ；東北大学の構成員として学問・教育を下から支える事務職員を対象としたもの；役職外、助手、一般職のパネラーも入れて欲しい；講師として、内部の女性や男性も；次代を担う学生と関わり；今回は基調講演等外部からの人であったが、第2回、第3回と継続して、内部から自由な声を取り上げて講演者、パネリストを選べば、大学内の「自由闊達な空気」という条件作りが進んでいることの証拠となると考える；東北大学において特に男女共同参画推進は重要だと思う。ワーキンググループの活動を通じて、やはり悪気なくというか、気付かず、慣習として男女差があると思う。これに気付いて頂くためには、もっと女性の教官など発言力がある立場の人を増やすべきだと思う。そのためには、教授などが参加する会（シンポジウム）でなければ意味がないとはいいませんが、足りないと思う；全学の女性教授と学部長を一堂に会したパネルディスカッション；反対意見グループとのディスカッション；女性の役割の少ない部門と、多い部門と混ぜた議論；一定の間隔を持って続けて頂きたい；今後継続的に結果報告をふまえたシンポジウムの開催。

3. 男女共同参画に関するシステム

政策、施策、委員会レベルでの話ではなく、具体的に利用できる仕組み；家庭と仕事をどのように両立するか悩んでいます。相談する先輩も少なく具体的に話を伺える場を作って欲しい；原先生が今回のシンポジウム開催にあたり保育室がないことを指摘されていたが全くその通りだと思う。（エルパーク等の市民会議では必ずある。）私は子供がいないので、保育のボランティア等で協力できると思う。そういった気配りのできる企画であって欲しい。

Q11 東北大学における男女共同参画推進、または学問・教育におけるジェンダー問題についてのご意見をお聞かせ下さい。

男女共同参画に関する一層の啓発と実行、情報の公開、家庭、地域・自治体との連携の必要性およびサポート体制等に関する意見が多く寄せられた。

寄せられたご意見

1. 男女共同参画に関する一層の啓発と実行

全学教育科目「ジェンダー学」による教育普及；ジェンダー学の必須化；この会への参加を研究室の男子学生に持ちかけたが、みな「いや～どうも」と関わりたくない様子でした。共感してもらうことは難しいとしても、強制的にでも多くの人に現状認識させることが必要である；ジェンダー問題は子供の頃からの男女についての考え方の延長にあると思う。意識変革のためには大学だけではなく、小中高校での教育も重要；男性にジェンダーの問題を気付かせることが一番解決に近い；身体的差異は如何ともしがたいと思う。「男は男らしく」「女は女らしく」お互いに尊重・協力しあい、相互に補い合うことが必要と思う。学問・教育・学術の世界に社会的性差別があってはいけないと思うし、してはいけないと認識すべき；ジェンダー問題は学内に存在しないと考える男性教職員へのジェンダー教育を積極的に行うべきである。小さなことから実践が大切である；男中心社会の中であって、男女共同参画社会を作るには教育が大切と考える。それを論じるとともに、教科に入れるなどシステム化を図る活動をして欲しい；男女別学の解消と意識改革をはかるための教育の強化；人事権、運営権を持つ人々は偏見を持っていることにすら気付いていないが、教育や育ちを考えると仕方なく、若手から実践的に押し上げることが必要。若手は男女を問わず、自分のために働くのであり、日本のためとは考えていない；工学部は女性の少ない世界だと改めて分かった。しかし、彼女たちのやる気は男性以上だと思う。これから大学を目指す世代の女性の中には工学等、理系分野に関心を持つ人が多いと思うので、彼女たちを大学の世界、ひいては大きな学問の世界にどう引き入れていくかが工学部の使命だと感じる。重要なのは大学、そして社会全体がこの理念を認め、それに則った行動を支援して行くことだと思う。それには人々の意識の大きな変化が必要；シンポジウム参加者はある程度意識していると思うが、多くの人に繰り返し伝える必要性を感じた；画期的な活動だと思う。男女の意識的・心理的ギャップを超えて、真の意味で有効な意識改革の担い手となることを切に望む；女子が男子と同等、あるいは優れていても、そのときの人事権において生かされないという認識は広まって欲しい。女が男より上にゆくことを好まれない雰囲気があり、男性の意識が変わることも必要。上に立つ人は下の者の人間関係（女と男が働くこと）に気を配って欲しい；東北大学でこういった取り組みがなされるのは素晴らしい。教授秘書には圧倒的に女性が多い。教授陣が秘書の身体的特徴等について酒の話題にすることがある。秘書も男性が採用されるようになってくれば文化が変わると思う；共同参画の良い点を浮き彫りにする企画や世論作りの試みを続けて欲しい；学生に対するアピールがない。大

学である以上、学生が積極的に参加できる組織が必要；ジェンダー問題をもっとPRし、日本全体が上辺だけでない本物になることを切望する。意識改革は理論ではなく、実行である；一部ではなく、全体を通して向き合っていくテーマであると思う。その提言や活動、風潮を建前で変えるのではなく、本音で改善に向けて変革ができるよう、このようなテーマについて考える機会を人々に施せられたらと思う；宮城県の男性優位土壌を改善するには、行政に対する東北大学の指導性を強く望む。男女別高校についても声をあげて、男女共同参画社会を担う若者を育てる高校を作るために力を出して欲しい。

現実として職場で女性は出産・育児、また、子供や親の病、授業参観などで休むことが多く、あてにできないことがある。責任ある仕事やポストをこなせない現状があり、女性の側での意識改革も必要。しかし、基本的には男性上位で多くのことが処理されている；女性自身の甘さを指摘できる雰囲気があっても良い。男性教官として女性に強く期待しても、「私、女性だから」「別にそこまでして頂かなくても」などといわれてしまうことがいまだに多い。男性への呼びかけも重要であり、女性自身の啓発を積極的に行うことはもっと重要である；非常勤講師にもっとチャンスを与えるなど女性教員採用の状況改善をもっと進めて欲しい。カリキュラム改正などにより教育現場における共同参画実現を促進して欲しい；部局毎の目標値設定と結果を毎年学報で報告。

2. 情報の公開

東北大学内での現状について詳しい資料（男女比や教授数等）を是非見たい；どこに、どういう資料があるか明示して欲しい；男女共同参画の推進を公表・公開して欲しい。特にホームページ等の充実をお願いする。そのような情報を入手できれば（茨城大）学内への参考資料として配付でき、かつ啓発に役立つ；女子学生の訴えなどの内容を多くの教官に情報としてきちんと伝えることが重要。

3. 家庭、地域・自治体との連携の必要性およびサポート体制

宣言の方針が具体的に進められるように願う。さらに研究室や家庭あるいは身近な社会で共同参画かつ民主主義が実践されているかを各自が点検し実践しなければならない；男女共同参画は男性が女性の、そして女性が男性の側に参画することだと思う。その際家族や地域といった社会構造全体も見渡すことも忘れてはいけない；様々な決定権を持つ立場にある教授・助教授の意識は日々の生活の中から生まれ、そして変化する。頭では理解していても実際のところ本当に理解しているのかどうかを、例えば家庭生活の中

に見るという視点がある。毎日の家庭生活の中で、果たして男女共同参画をしているかどうか。これを抜きにして仕事場での男女共同参画はあり得ないと思う；当大学の職場の環境はきわめて悪い。男女を問わず、家庭を持つものにとって仕事がつらい環境ではないだろうか；全国の先駆けとなって頑張りたい。自治体との連携も願います；東北大学歯学部では男女比や仕事面などで大きな問題があるとは思えないが、学生と教員で男女比が全く違うのは世代の違いもあるかもしれない。育児休業のシステムが働いていないためと思う；パパクォータ制のような、男性に育児休暇を強制的に取らせる制度が必要。それで男性が当事者になるから；女性が出産育児の時期を乗り越えて仕事を続けていけるサポート体制が必要である。特に子供や家族が病気になったときに仕事を休める環境やシステムを準備してほしい；女性職員・教官・女子学生の子女（幼児）の保育施設を学内（職場・構内）に、アウトソーシングも念頭において推進してほしい；女性が学びやすい、働きやすい環境作りがまだまだできていない。意識改革だけでなく、設備・システム上での改革もなされるよう期待する；東北大学において、具体的にどのような男女共同参画推進の活動がなされているのか知らないが、身近なところでジェンダー問題（女子だから不利益を被るなど）を感じたことはあまりないが、この先将来を考えたときにこのような企画、会社や女性のネットワークがあるというのは心強い；研究室のセミナーを夕方から夜にかけて設定しないでほしい。夜にそのようなセミナーを開くことは子供を持つ人に対する意識が足りない。そのような環境にこれからの若い人たちをおくのは間違っている。

4. その他

日本で初めて女子学生を入学させた大学だからこそ、この問題については力を入れて取り組むべきだと思う；女性の進学や社会人入学、産学連携などで、他大学に先んじていただけに男女共同参画についても是非大きな役割を担い、果たして頂きたい；東北大学では男性女性の人格を平等に扱い、機会均等の努力をしている中で、セクハラ問題が多発するのは残念；女性との比率を単に上げるというだけではなく、東北大の将来性を向上させるために男女に機会を均等に与えるという立場を崩さないでほしい；医学系学部の本格的改革（封建制の廃止）を望む；「女子はいらない」「腰掛け」の言葉を言わせない。女性の幸せを各人つかむように願っている；「男女」ではないもっと広い意味の新しい言葉が必要だと思う。

出産により研究を断念するというのを親の側からの意見だけで論じられていますが、

子供の立場から考えた意見も交えるべきだと思います。自分の子供を見ていて特に感じるのは母親の代わりは誰にもできないということです。研究を続けることも国益にかなうことですが、母親として生きることは決してマイナスではなく、長期的視野にたてば国益にかなうことだと思います；過去における”女性に対する大学の開放”の東北大の歴史はすばらしい。しかし現状はよい状態にはないように思う。帝国大学での門戸解放は大学の自信と勇気の賜である。どうか今日においても”自信と勇気”は健在であることを示してほしい。数値あわせのために他大学から人材を登用するのではなく本学で”育てた”人材を登用して初めて東北大学としての意味があると思う；友人が大学院に進学しました。彼女たちが研究しやすい環境を作ってください。お願いします；男女平等に関して将来明るい話を聞き、孫（高3）に今日のことを聞かせる。